

## イラン -- 急成長する女子サッカー（特集 途上国 ・新興国のスポーツ）

著者	山岸 智子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	237
ページ	26-27
発行年	2015-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00003187">http://hdl.handle.net/2344/00003187</a>

イラン

# 急成長する女子サッカー

山岸 智子

## ●サッカー人気

サッカーのワールドカップは、オリンピックをしのぐ数の人々が楽しんでいられるといわれるが、イランも例外ではない。映画「桜桃の味」で、地震で家をなくした人々や、テント暮らしの避難所や、なんとサッカーを観戦しようとアンテナを立てている様子が描かれていることから、その人気のほどが推し量られる。人気の理由としては、サッカーという競技そのものの魅力に加え、政治・経済的には「封じ込め」の対象とされがちなイランが、アジア代表枠を勝ち取り、「世界」的にそのプレゼンスを示し、国民的に溜飲を下げる事ができることもあるだろう。

一九九八年のフランスワールドカップにイラン代表が出場できると決まった時、テヘランの街角ではたいへんなお祭り騒ぎが沸き起こり、そのなかには旗を振って喜

びを全身で示す若い女性たちも含まれていた。そして同年、女子サッカーが国のレベルで公認競技になったのである。

## ●イランの女性アスリート

イランでは、レザー・パフラヴィー国王（在位一九二五〜四一年）による近代化政策の一環として、さまざまなスポーツ振興策がとられ、学校教育で女子にも体育の教科が導入された。女性アスリートの育成は、さらにモハンマド・レザー・パフラヴィー国王に継承され、一九六四年には東京オリンピックに女子選手を送るまでになった。

一九七九年イラン・イスラーム共和国の樹立により、すべての法がイスラームの諸基準に適わなくてはいけない体制になって、男女隔離が厳格化され、セクシーな部分を覆うべしという服装規定も公

共の場で課されるようになった。「文化革命」という名目で大学が一時的に閉鎖され、折からのイラン・イラク戦争のための諸々の統制も相まって、スポーツを楽しむ余地は極めて限られたものとなった。当時、欧米の識者の多くは、

イランの権威主義体制の下で女性の権利や平等の進捗は到底望めないだろう、と考えた。ところがイスラーム共和国樹立から二〇年も経ってみると、研究者が「イランのパラドクス」と呼ぶような現象が進行していたことがわかる。女子の進学率は飛躍的に伸び、一〇代の女の子たちが選挙のためのNGO活動にいそしみ、少数ながら女性の政治家が存在を示すようになり、女流文学者や映画監督などは、国王時代よりも数多く活躍するようになっていたのである。

男女別学の学校で女子児童・生徒たちは、体育の一環としてバス

ケットボールやバレーボールなどをしていく。私設の空手教室やテコンドークラスなども人気があるようだ。女性のためのスポーツクラブは、一九九八年から二〇〇五年の間に倍増したとの報告もある。とはいえ、女性の方がスポーツ施設や国からの補助金が少ない、ニユースなどにとりあげてもらえない、という問題も指摘されており、まだまだ発展の余地は大きい。異性の試合を観戦できないことへの不満を表明する若者もいる。

女性スポーツの公式な諸団体は体育協会副会長のもとで統括されている。「女性と家族の文化社会協議会」ウェブサイトによると、イラン暦一三八九年（西暦二〇一〇〜一年）にイランが公認するスポーツ団体に所属する女性アスリートは、多い順に、バレーボール六万八千三百三人、空手五万三千九百一人、テコンドー五万三千三百七人、体操五万二千五百七十六人、水泳五万三千四百三人、バスケットボール二万六千五百三十九人、サッカー一万九千七百八十八人、二年前に比べて一・五%の増加と発表されている。この数値が競技人口そのものであるとはいえないだろうが、国家的にこうしたレベルで女性アスリート



イラン・サッカー協会にて（筆者撮影）

が把握されていることは一定の指標となるだろう。

二〇一四年に仁川で開催されたアジアオリンピック・パラリンピックでは、空手六八キロ超級でイランの女子選手が金メダルに輝いたのみならず、テコンドーやエアライフルなどさまざまな競技で多数のメダルを獲得した。

### ●女子サッカーの台頭

イランで女子サッカーが始まったのは一九七〇年代とされるが、国際的な場で活躍することなくイスラーム革命後の困難な時期とな

り、公式に国のスポーツ競技と認められるようになったのが一九九八年である。男性のトレーナーや監督を招くことが難しいという不利な条件を抱えつつも、女子代表チームは二〇〇五年、二〇〇七年の西アジア杯でファイナルまで進み、一八歳以下のチームは二〇一〇年のユースオリンピックで四位となった。イランの若者向けの雑誌なども、男子選手と比べると控えめながら、女子サッカー選手のインタビュー記事を掲載するようになった。

彼女らの目覚ましい活躍は、BBCなど国外のメディアでもとりあげられた。二〇〇八年にはドキュメンタリー「Veil of Dreams」が制作されて、日本のBS放送でも放映され、彼女らの苦闘と成長は広く知られるところとなった。二〇一一年に西アジア杯で優勝した女子サッカーチームは、二〇一二年のロンドン・オリンピック出場をめざした。ところが、ヘッドスカーフ問題が彼女らの行く手を阻んだのである。

### ●ヘッドスカーフ問題

イランの女子選手は、特に不特定多数の男性が観るかも知れない

国際試合では、長袖シャツ、長いパンツに、髪や首筋を完全に覆うユニフォームを身に着ける。それがイスラームの基準に従った服装であるとの国家的な見解を反映しているのだ。他方、国際サッカー連盟（FIFA）は、二〇〇七年からヘッドスカーフを着用してサッカーの試合をすることには難があるとして、イランサッカー協会にユニフォームについての勧告を行うようになった。イラン側もその都度、頭髮を覆うもののデザインを変更して対応した。

二〇一一年六月、ロンドン・オリンピックの予選のためにヨルダンに赴いたイラン女子サッカー代表は、試合直前になって、ユニフォームが不適切だとして試合放棄を余儀なくされた。六カ月にわたってトレーニングを積んできた選手たちはフィールドで泣き崩れ、胸が張り裂ける思いである、これでイランの女子サッカーはおしまいだ、と語った。

ところが二〇一二年六月、FIFAは、安全性が認められたから式試合に出場してよいと発表した。この背景には、サッカーの振興に熱心なヨルダン王族アリー・イブ

ンリアル・フセインがFIFAの副総裁となって尽力したことがありといわれる。

国際試合に出られなくなったイランの女子サッカー選手たちは、フットサルに転じ、二〇一三年のアジア室内競技大会では、日本のなでしこチームに次ぐ二位となり、主力のフェレシユテ・キャリミー選手は、世界の一〇人の女子フットサル選手に数えられた。

### ●期待

二〇一五年三月、リオデジャネイロオリンピック予選のチャイニーズ・タイペイ戦に敗れたため、残念ながら次のオリンピック出場は望みながら、彼女らはワールドカップ出場を夢みながらトレーニングに励んでいる。二〇一四年八月、日本サッカー協会とイランサッカー協会はパートナーシップ協定を結び、女子サッカーの活性化についても協力し合うことを約束した。イラン女子サッカーチームがなでしこジャパンと競い合いながら世界的な舞台で活躍する日は決して遠くはないだろう。

（やまぎし ともこ／明治大学政治経済学部教授）